

第1分科会

「多様性の中で互いに育ち合う教育の 在り方とクラス集団の育ち」

助言者	益満 孝一 (鹿児島純心女子短期大学生生活学科こども学専攻教授)
司会者	福 彩音 (ひまわり幼稚園)
問題提起者	増永 あい (たにやま幼稚園)
記録者	藤本菜由希 (たにやま幼稚園)
記録者	折田 華愛 (たにやま幼稚園)
運営委員	田中 裕一 (鹿児島幼稚園)

【研究課題】

愛されて育つ子ども

【研究・研修の視点】

近年、不適切保育という表現がなされるようになった。私たちが幼児と向かい合う時に、保育の知識や技術も大切であるが、すべての子どもは愛されて育つという原点に立ち返ってみることが必要ではないかと考える。その様な観点からこの主題を取り上げてみた。

教育要領において教育課程編成上の留意事項として示されている、「入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり、幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになり、やがて幼児同士や学級全体で目的をもって協同して幼稚園生活を展開し、深めていく」為に、保育者はどの様なかわりをしていくことが大切だろうか。

幼児の主体的な活動が深まり、互いに必要な存在であることを認識していくためには、幼児一人ひとりが本当に愛されて育つこと、一人ひとりが大切な存在であるという環境で育つことが必要ではないかと考える。多様性の中で、一人ひとりの個性が尊重され、大切ないのちを生きるという環境づくりを、日常の生活の中でどの様に構築していくことが必要かを考えてみたい。

【研究・研修の手がかり】

「子どもは愛情の中で育つ」という原点に立ち返って自分たちの教育・保育を見つめ直すと共に、多様性という観点から「いのち」の見つめ直しを行う。

【研究計画】

(令和6年度) 一人ひとりの様々な違いを受け止め、互いに大切ないのちを生活しているということを幼児が感じられる環境づくりを、日常の生活の中でどの様に構築していくかを考える。

(令和7年度) 互いの存在を認め合い、個と集団のそれぞれの役割を生かした保育を目指して

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマの捉え方

多様性の中で互いに育ち合う教育の在り方は、クラス集団の育ちと不可欠なものといえる。幼児一人ひとりが本当に愛されて育つこと、一人ひとりが大切な存在であると感じられる環境づくりの構築を考える。

(2) 研究の内容と方法

- ① 医療的ケアを受ける3歳女児と、集団行動が特に難しい3歳男児とのかかわりを通して、一人ひとりの違いを認め合える心情の養育について考える。
- ② 職員間において自分たちの教育・保育を見直し、多様性という観点から「いのち」の見つめ直しを行うために、学年会、職員会、外部とのミーティングを行う。

(3) 実践例

- ① 医療的ケアが必要なAちゃん（3歳児）
 - ・ 肢体不自由児でバギー（車いす）、ずり這いで移動
 - ・ 持病の関係で頭に機械を入れている
 - ・ 背中のおもむき部分は圧迫しないよう気を付けている
 - ・ 園で1回給食前に看護師による導尿を行う
 - ・ 「Aちゃんはどのようにしてベビーカーなの？」「Aちゃんは赤ちゃんなの？」という周囲の幼児の受け止め方
 - ・ 運動会におけるAちゃんの自己主張
- ② 集団行動が特に難しいBくん（3歳児）
 - ・ 自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害傾向あり
 - ・ 集団の流れに沿って活動することが難しく職員がついて対応
 - ・ 突発的に危険な行動や異常行動をする
 - ・ 友だちへの興味はあまりなく、一人遊びが多い
 - ・ 意思疎通がうまくいかず、乱暴な行為に及ぶBくんを避ける周囲の幼児
 - ・ 昆虫に興味を持ち、詳しく説明できる姿

(4) まとめ

保育者が幼児一人ひとりに愛情をもって接し、多様性の中で一人ひとりが大切な存在であることを保育者が受け止める姿、また、一人ひとりにどの様に接するかが幼児の育ちに反映されていくのではないかと考える。多様性の中で、それぞれの存在を個性として受け止め合うことがクラス集団の育ちにおいて大切であり、保育者の果たす役割は大きいといえるのではないだろうか。

幼児一人ひとりがかけかけのない個性ある存在として認められると共に、自己肯定感をもって育まれることが可能となる環境の整備は、私たち社会全体の責任ではないだろうか。

(5) 今後の課題

- ① 年齢が上がり、それに伴い心身が成長にしていくなかで、他児との違いに葛藤する場面が増えていくと考えられる。自己受容していく過程において、母親との関係も含め、家庭と連携しながらどの様にかかわっていくか考えていく必要がある。
- ② 多様性の中で、周囲の幼児が受容していくことができる為に、保育者はどのような言葉かけやかかわりをしていけばよいのか。
- ③ 保育者が一人ひとりに愛情をもって接し、見守っていく時間には限りがある。就学等、次の段階に進む時に、どのような連携をとっていけるのか。

【討議の柱】

- ① 愛情をもって幼児一人ひとりとかわっていくために、どのようなことを考え、そのことを実践していくには保育者はどうあるべきか。
- ② 支援を必要とする幼児を他の幼児が受け入れ、ともに育ち合えるクラス活動を進めていく為に、保育者はどのような支援を必要とするべきか。

【質疑・応答】

質問：Aちゃんのことを理解してもらおう為の周りの子へのアプローチの仕方について

回答：疑問を持った子に対しての個別での説明やAちゃんがない所での全体への説明をした。普段から誰でも得意、不得意なことがあることや自己肯定感を高めるための言葉かけをするようにしていた。

質問：Bくんが2学期に入ってから集団への参加が難しくなった理由について

回答：入園当初から参加が難しいこともあったが、2学期に入り行事が多くなってきたことから、更にBくんがしたいことができないストレスを感じ、癇癪を起こす回数が増えた。また、他児にも危害を加えるようになった為、クラス運営が困難になり主任に相談し、支援体制の再編を行った。

質問：Bくんの保護者との関わり方や様子の伝え方について

回答：普段から様子を伝えるなどしてコミュニケーションはとっていたが、直接話す機会がなかなかとれなかった。2学期に入り集団活動への参加が困難になったことを伝えるために、面談する時間を設けてもらった。また、Bくんの様子を見てもらうために、保護者への許可を取って動画撮影をし、幼稚園での様子を見てもらうことで、保護者の理解と連携が深まった。

質問：Bくんが怪我をさせたときの保護者への伝え方はどうしていたか

回答：他児に怪我をさせることが多かったわけではない。事案があった場合には両方の保護者へその時の経緯や状況、双方の保護者が納得いくように、調整したり、思いを伝達したりした。また、幼稚園で事案が起こったことで、防げなかったことには謝罪をして誠意を示した。

◎質疑応答の後、グループ討議を充実させるために助言者の益満先生による構成的グループエンカウンターに沿った話し合いが行われた。



【討議内容】

① 愛情をもって子ども一人ひとりと関わっていくために、どのようなことを考え、そのことを実践していくためには保育者はどうあるべきか。

- ・自分のことを伝える、スキンシップをとる、挨拶をする、保護者とのコミュニケーションを子どもとの会話に活かす、子どもの話をよく聞く等をして子どもとの信頼、愛着関係を築くようにしている。
- ・子どもに愛情を持って接するためには、まず自分自身を愛することが大切である。苦手なことがあっても他に良いところを見つけ、褒めて認めるようにする。また、保育や子どもの関わり方に悩んだときは、先輩保育者に相談しアドバイスをもらうようにしている。
- ・保育者の自己肯定感を高めることが大切であり、そのために職員同士で情報交換をしたりペップトークでポジティブに子どもたちに伝えたりしている。そうすることで、保育者に余裕ができ愛情を持って保育することができる。
- ・子どもの人権や今社会で起きていることを学ぶようにする。子どもとのコミュニケーションの取り方は、一人ひとりに合わせて愛情を注げるように工夫する。一人ひとりをよく見て、知ることによって楽しく笑顔で過ごせるようにという思いを持てるようにする。

② 支援を必要とする子どもを他児が受け入れ、共に育ち合えるクラス活動を進めていくために保育者はどのような支援を必要とするべきか。

- ・支援が必要な子どもに対して視覚的に有効な表情カードを使って繰り返し教えたり他児に対しては支援が必要な子の心情を代弁したりすることで保育者と一緒に他児も成長を喜ぶことができている。
- ・支援が必要な子どもに対しても他児と同じように接し、集団行動に参加できるようにする。保育者がモデルとなって丁寧な関わり方をする。
- ・知識をつけるために専門家の方に来てもらい、学ぶ機会を設けている。
- ・保育室に安心材料を置く。周りが支援の必要な子に話しかけてくれる環境作りや一緒に参加できる活動を取り入れて協力できる機会を作る。友だちの良いところを見つけて発表する機会を作る。

【助言者のまとめ】 助言者：益満 孝一先生（社会福祉士・精神保健福祉士・公認心理師）

- ・子どもたちが持っている潜在能力や在り方（あるがまま性）を大事にする時代になっている。社会的背景として価値観の多様化もあり、教師がこうなったらいいなという教育をしてしまうと不適切、あるいは保護者との価値観と一致しないことが生じることがある。教育＝文化（価値観）をお互いが調整し合い、合意形成を行う必要が高まっている。また、保育者とは文化（社会）の最前線で次の日本を背負う子どもたちの発達や発育を支援している。そのため、子どもの権利条約にある子どもの最善の利益、意見表明権等を根拠として、子どもたちやその家庭と一緒に「多様性の中で互いに育ち合う教育環境」を作っていく必要がある。

Microsoft Bing に標準実装されたCopilotを利活用して、次の項目についてまとめた。

◎幼稚園で愛のある子育てを実践するために

1. スキンシップ：子どもを抱きしめたり、手を繋いだり、頭を撫でたりすることで、愛情を直接伝えることができる。これにより子どもは安心感を得て、精神的に安定する。
2. ポジティブな言葉かけ：「ありがとう」「よく頑張ったね」など、ポジティブな言葉をかけることで、子どもの自己肯定感を高める。
3. 笑顔で接する：保育者が笑顔で接することで、子どもたちも安心し、楽しい園生活を送ることができる。
4. 目を合わせる：子どもと話すときは、必ず目を合わせるようにする。これにより、子どもは自分が大切にされていると感じる。
5. 一人ひとりを尊重する：子どもの個性や興味を尊重し、その子に合った関わり方をすることが大切。
6. 保護者との連携：保護者と密にコミュニケーションを取り、子どもの成長や日々の様子を共有する。これにより、保護者との信頼関係が築かれる。
7. 遊びを通じた学び：遊びを通じて、子どもたちが楽しみながら学べる環境を提供する。自然との触れ合いや園外保育も取り入れると良い。

◎医療的ケアが必要な子や支援が必要な子に対する保育者の関わり方や環境作りについての考察

1. 子どもたちの疑問への対応：医療的ケアが必要な子どもに対する他の子どもたちの純粋な疑問にどう答えるかを考える。
2. 環境作りと保育者の関わり：子どもたちが自分を大切な存在と感じられるような環境作りや保育者の関わり方を考える。
3. 多様性の中での教育：多様性の中で互いに育ち合う教育について日々の保育の中での具体的な場面や出来事を振り返る。
4. 愛情の重要性：保育者が日々愛情をもって子どもたちに接する事の重要性とその結果としての子どもの成長について考える。
5. 集団生活の中での個別対応：集団生活の中で一人ひとりに目を向けることの大切さと援助が必要な幼児に対する配慮について考える。
6. 他園との意見交換：他の園との意見交換を通じて医療的ケアが必要な子どもや支援が必要な子どもに対する対応方法を学ぶ。
7. 保護者との連携：保護者との信頼関係を築くための方法について考える。
8. 具体的な実践例：多様性の中で子ども一人ひとりに愛情をもって接する具体的な実践例を知る。

◎最後に4、5人のグループを作りお互いを褒め合う（コンプリメント）の演習が行われた。コンプリメントは、ポジティブな言葉かけを一人に対して、他のメンバー全員が行う。褒める体験と褒められる体験をとおして、ポジティブな言葉かけの意義を体験的に学び、グループの一体感を体感できる。

